

Webで復刊

中大英字紙「白門ヘラルド」

～現役学生とOBの絆で11年ぶり再登場～

中央大学文学部3年 加藤 静香さん

2001年に発行45年間の歴史にピリオドを打った中央大学英字新聞「白門ヘラルド」が7月に復刊した。11年ぶりの再登場はWeb版「HAKUMON HERALD」として装いを変えた。立ち上げの決意、メンバーの呼びかけ、英文の記事執筆…と新たな歴史の扉を開いた。つらかった坂も登り切れば達成感を味わえる。以下は牽引者、加藤静香さんの復刊までのストーリーである。



力を出し合った王琳(おうりん)さん、三橋乃佑里(のゆり)さん、加藤静香さん(写真左から)



ヘラルドって何

朝、目を覚ました時に浮かんだ光景は、昨晚のことだった。

頭のなかに廻ったのは、「白門ヘラルドOB会『DVD復刻版』完成披露パーティー」での光景。1年半かけて完成させた復刻版DVDをビジネススーツ着用の大勢の人たちが熱く、青年のように話していた。白門ヘラルドは全国で14番目の大学英字新聞、1956年から45年間発行、2001年に廃部廃刊した。

へえ、と思った。聞いたことのない団体、ヘラルドって？ただOBたちの力強い声だけはよく覚えている。いつもとは違う朝を過ごして授業へ向かった。すっきりしない一日だった。ゼミが終わってから、電車で駆け込んだ。急いでカバンから英字辞典を取り出し、「ヘラルド」の意味を調べた。布告者、報道者。ヘラルドにはもともと、王様の行幸などで行く先々に「触れ回る」役目を意味するらしい。新聞らしい名前だな、と、思っ辞典を閉じた。

白門ヘラルドが気になっていた。次の日も、その次の日も。頂いた復刻版DVDを見てみよう。白門ヘラルドを知ることにした。

「ヘラルド」の名前の由来は、米国の代表的新聞で、1887年に創刊された「ニューヨーク・ヘラルド」(現ニューヨーク・タイムズ)にちなんでいることが分かった。当時の白門ヘラルドには学園紛争、箱根駅伝6連覇、ノーベル文学賞受賞者バートランド・ラッセル氏の寄稿。記事は多岐にわたっていた。学内外を奔走する当時の学生記者の姿が、頭に浮かんだ。

復刊しよう

復刊しようと思った。こう決心するまでに、何度手帳を開いたか分からない。私は交換留学のために、7月末で日本を離れることが決まっていた。現在はスウェーデンで留学中。

白門ヘラルドを知ったのは5月18日。出国まで2か月弱。でも、できる。そう思い込むことにした。白門ヘラルドOBの北村佳達氏(1966年卒)に連絡を取り、北村氏と飛

<http://www.hakumon-herald.com/>

山将OB会会長(1960年卒)両先輩から、白門ヘラルドのこれからについてアドバイスを頂いた。団体名を「中央大学英字新聞学会」に、新聞題字は「白門ヘラルド」とした。名称をそのまま受け継ぎ、復刊への準備が始まった。北村氏から借用した当時の記事は、色あせて茶色になっていた。歴史を受け継ぐんだ、と思った。

ポスター貼り

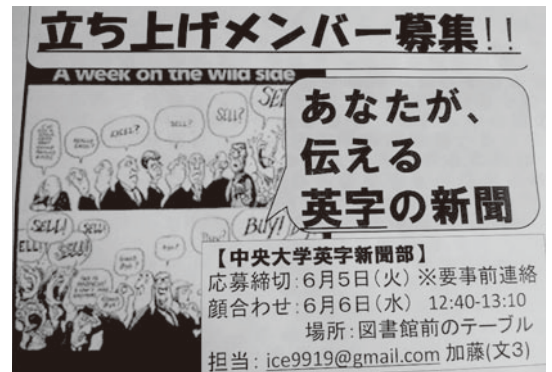
「俺様を取材してみない? 英字新聞学会設立メンバー募集中」。毛沢東・元中国国家主席の顔写真を載せたチラシやほかのデザイン案チラシを多摩キャンパス内に貼った。英語圏だけでなく、世界に視野を向けている人たちと一緒に白門ヘラルドを作り上げたかった。

その日、関東地方が梅雨入りしたと聞いた。チラシが雨に濡れないといいな。そう思いながら空を見た。

チラシを貼ってから2週間が経った日に説明会を開いた。概要を説明した。そして、メンバーが決まった。6人でスタート。復刊はWebで行うことにした。いつでも記事が読めるという身近さを考慮したためだ。取材内容や理念など団体の基盤づくりと、記事執筆を並行して行う。打ち合わせに使う図書館前のテーブルから見える景色は、日ごとに木々の緑の色が濃くなっていく。出国まで1か月を切ろうとしていた。



立ち上げメンバーで打合せ



記事を書いたことがない

「日本語ですら記事を書いたことがないのに、英語で記事なんて書けるのか」。部員の中から素朴な疑問が浮かんだ。特別な文章経験を積んだ者はいなかった。そこで力を貸してくださったのが、飛山OB会会長だ。元共同通信記者から、記事の書き方をレクチャーしていただいた。私たちが英字新聞の記者になると思うとワクワクした。

7月19日、Webで復刊した。世界に興味のある学生をターゲットとし、世界と日本で起きていることを多角的に見るための記事を掲載。社会、政治、経済、スポーツ、大学、キャンパス・ビューティー、エンタメの7分野にコンテンツを分けている。「常に自分への分析を繰り返すことは大切。自分が10年後にどうなりたいかは、今何をするべきかと大きく関わるから」。取材を通して得た言葉は、私の日常を充実させている。

復刊した日も、目標達成、という気持ちはなかった。より良い団体になるためのことを考えたら終わりはないと思った。しかし、現在でも英字新聞学会が存続しているのは、良い仲間にも恵まれたことと、OBの方々のサポート以外の何物でもない。もらったメールの何気ない言葉が私の勇気になったことは、忘れることはないだろう。そして、飛山会長、豊島棟克氏(1968年卒)をはじめ、文章チェックを快く引き受けてくださったOBの方々には感謝しきれない。

OB諸氏と学生部員との顔合わせも行った。話をしていくうちに、過去の勢いを今につなげていきたい、そう思い始めた。この場でお礼と感謝をしたい。

現在は、10人で活動を行っている。日本語、英語の文章校正は、英字新聞学会のOBの方に見ていただいている。

大学の木々が緑を濃くしようとしていたころ、白門ヘラルドを復刊させようと立ち上がった。そして今、第3号の記事の準備が進んでいる。窓の外から、赤や黄色に色を変えた葉が、風に乗って空へ向かうのが見えた。時間って流れているんだ、と思った。

復刊に携わってよかった

編集長・磯貝 健人さん
(法学部1年)

「テニスサークルに入っていましたが、『せっかく大学に来たのだから何か新しいことを始めたい』『文化的な活動もしたい』と思い、英字新聞部の復活に参加することにしました。加藤さんが日本を発つまでに時間がなく、急ピッチで話が進みましたが、無事ホームページに復刊できてよかったです。せっかく復刊させたものをいかに継続するかを考え、人数を増やし体制を整えるため準備期間を設けました。この10月24日にリニューアルして再復刊できました。大変なことが多いですが、非常にやり甲斐があり、改めて復刊に携わって良かったと思います。これからも頑張っていきます!」

個性を大切にしたい

編集長・古寺 雄大さん
(文学部1年)

「編集長として部員全員の記事を見ていくと、皆良くも悪くも個性が出ます。良い個性をどのような英語表現で生かすのが適切なのか、悪い個性はどのように書き直せば読みやすくなるのかななどを学べるのは、とても有意義です」

■復刊までの経緯

- | | |
|------|-----------------------------|
| 5・18 | 白門 Herald 復刻版 DVD 完成披露パーティー |
| 6・6 | チラシで呼びかけたメンバー初顔合わせ |
| 6・12 | OBと再会、復刊へのサポートを依頼 |
| 9 月 | Web版で復刊、当初の部員6人が10人に増えた |



先輩たちがバックナンバーをDVDにして披露したパーティー、復刊の動きはここからスタートした

目頭が熱くなった

白門 Herald の会 会長 飛山 将さん

加藤静香さんから「白門 Herald」復刊の計画を打ち明けられたとき、年のせいか思わず目頭が熱くなりました。40年余り続いた新聞が事実上廃刊となったのが1997年、「英字新聞学会」は2001年に廃部となりました。数年後にOB会が発足、有志が2年半かけ散逸したバックナンバーを集めてDVDにまとめました。加藤さんの話は、そのDVDのお披露目パーティーが終わって間もなくのことでした。「まるで瓢箪から駒ですね」。私はOBの一人の言葉にうなずき、DVDを作成した苦勞が報われた気がしました。

OBの多くは「DVDが復刊につながれば」と密かに願っていました。だが、自分たちにできることではなく、漠然と新聞創刊時の母体だった「英語学会」(ESS)の現役学生諸君に期待するしかないだろうと考えていました。OB会にとって、加藤さんたちのイニシアティブは「渡りに船」だったわけです。

大学の公認団体に

中大だけでなく、他大学にもあった英字新聞はほぼすべて学園紛争のあと廃

刊になりましたが、最近その一部でDVD化や復刊の動きが見られます。ここでも遅れをとらずに済みそうだと、胸をなでおろしています。

「Herald」のバックナンバー全149号は中大のとくに戦後発展の歴史の一端をつづっています。再興された「英字新聞学会」の現役諸君が、そのジャーナリズムの役割を引き継ぎ、継続していってくれればと大いに期待しています。そして、継続が大学当局による会の公認につながるよう切に願っています。

心から感謝と激励を

白門 Herald OB 北村 佳達さん

復刻版 DVD 完成パーティーで、学生記者との話題は必然的にOB会の強い熱望である「君たちの手でぜひ復刊してほしい」の一語に尽きました。連絡先を聞き、翌日メールを送信。文面はパーティー取材のお礼と復刊へチャレンジ!のリクエストでした。

反応は予想外に早かった。加藤静香さんからでした。「北村さんからのメールを読み、気持ちがとても明るくなりました。ありがとうございます。実は私、アツと驚くようなことを考え中です。近くお会いすることは可能ですか」。喜んだ私は、いつ

でもお会いしましょう、と返信しました。

メールの第2弾が送られてきました。「北村さんにこんなに喜んでいただけたとは思いませんでした。私も立ち上げに向けての気持ちがとても強くなっています。迫力ある英字新聞縮刷版を貸していただけませんか。私たちの編集理念、発刊頻度、発刊媒体やOBの方々への正式なあいさつなどは週明けに決定します」

6月12日でした。パーティー以来の再会です。加藤さんから計画の概要を聞いて、これは本物と判断。急ぎよ飛山会長

を呼び出しました。すぐに英字新聞とは…というレクチャーが始まりました。

私は英字紙の復刊に関して次のような熱望を抱いております。将来できるだけ早く、(1)白門 Herald 復刻版 DVD を大学の英語教育の教材に採用願いたい (2) 入学試験の英語には英字新聞からの問題を一問加えていただきたい。このことが進めば復刊の大きな意義、そしてクオリティの高い学生英字紙の存在価値が、より大きく広くなるように思えます。熱き編集長や部員に感謝と激励を心から。

中央大学英字新聞のバックナンバーを収録した「白門 Herald」復刻版 DVD に関する問い合わせは電子メールでお願いします。

k.kozo@i.softbank.jp